

■創刊 ちょっといい話 3話

お駄賃はいつもの缶コーヒー

「高齢者向け配食サービス まごころ弁当」と掲げていますが、私たちのお客様は高齢者の方だけというわけではありません。
週に3日、お弁当をご注文しているHさんもそのお一人です。おしゃべりも少し早口で、ほんの数年前まではバリバリの会社員。ただ、脳梗塞で倒れてからは、右足に後遺症が残ってしまったそうです。

歩くのには杖が必要な状態ですので、私は以前からゴミ出しなどの簡単なお手伝いをしたりしていました。
お手伝いをする度にHさんは缶コーヒーを差し出してくれます。

いつものように月曜日の配達に伺うと、インターホン越しにいつもと違う第一声。
「あー、待ったよー、3日間暗かったもんですね」
何だろうと思い部屋にお邪魔すると、蛍光灯を持ったHさんが座っていました。

お話によると、先週の金曜日の夜に蛍光灯が切れてしまい、金土日の3日間を薄暗いなかで過ごしていたとのこと。

蛍光灯の交換くらいなら私でも容易にできます。少し談笑しながら手早く交換を済ませました。

「ああ、明るいね。これで夜も安心だ！はい、コーヒーあげる」
Hさんは満面の笑みを浮かべ、蛍光灯を見上げながら、いつものコーヒーを差し出してくれました。

お礼のコーヒーを受け取り、
「できることはお手伝いしますから、なにかあれば言ってくださいね」
と伝えました。

Hさんの家は毎日の配達で通る道沿いにあります。以前はヘルパーさんが通っていたのですが、その人もしばらく前からは見かけなくなりました。
「最近ヘルパーさん見かけませんか？」
と尋ねると、金銭的な理由のようだったので、それ以上は聞きませんでした。

Hさんの家を訪ねて来るのは、新聞の集金の方か、怪しい営業マン、そして弁当屋の私だけだそうです。

「Hさん、毎日の配達の手伝いだから、本当に困ったときは僕に電話してください」と伝えました。

「わかったよ、またコーヒー用意しとくから、困ったときはよろしくね」

「毎回コーヒーいらないですよ。困ったときはお互い様です！」
最後にそう伝えると、この日のHさんは笑顔で頷きながら見送ってくれました。

何度も「ありがとう、ありがとう、ありがとう…」と言いながら。

